研究所だより

当研究所では、現地の実態を的確に把握し業務推進に活かすため、新進気鋭の農業者に現地モニターを委嘱し、さまざまなご意見を伺っておりましたが、ここ数年会議が開かれていませんでした。せっかくの貴重な場をしっかり継続していく必要があると考え、本年度からは、農業者に加え農協の職員を含めた七名の新たなモニター体制といたしました。

平成二八年十二月七日にモニター会議を開催し、現地モニター―の方々と営農や地域をめぐる状況や課題・展望などについて率直な意見交換を行った後、天使大学の荒川教授に「生消連携と農畜産物加工品の販売促進」と題して講演をしていただきました。以下にその概要を紹介します。

モニター会議概要

出席者（敬称略）

・音更町　津島　朗（畑作経営）
・美唄市　貞広　樹良（稲作・畑作・野菜経営）
・名寄市　中野　康則（稲作・野菜・経営）
・新篠津村　大塚　早苗（野菜・稲作経営）
・京極町　高木　智美（畑作経営）
・士別市　真嶋　憲一（ＪＡ北ひびき営農部）

一般社団法人 北海道地域農業研究所
・副理事長 所長　飯澤理一郎
・専務理事　伊藤　則明
・常務理事　入江　千晴
・顧　問　黒澤不二男（司会）
・特別研究員　三津橋真一

飯　澤　皆さんこんにちは。今日はお忙しい中、また足元が非常に歩きにくい中、ご出席いただきましてありがとうございます。所長になって、一年余り経ったのですが、以前にモニター会議というのがあったという話を聞きまして、これはご意見をいただく場をどうしても作らなくてはいけないということで、再開した次第でございます。私たちは研究所と名乗っていますが、いつか役に立つかもしれないという研究では駄目なのではないかと強く思っております。そういうこ

とは主に大学などにお願いして、私たちのところはもう少し実際に役に立つ研究をしていかなければなりません。そのためには、本当に農協や現場でご苦労なさっている方々のご意見を可能な限りお伺いして、調査・研究の課題を設定する際の大きな参考にしていくことがとてもたいせつです。本日は、忌憚のないご意見を伺えれば非常にありがたいと思いますのでよろしくお願いします。

黒　澤　皆さんこんにちは。ご苦労さまです。再開という話を先ほど所長から申し上げましたがしばらく休眠しておりましたこのモニター会議。地域農業研究所の体制も変わりまして新しい役員の方々も現地の皆さま方の声を聞いて、研究所の業務に反映させたいということで再開をしました。

地域農業研究所の主な仕事は調査・研究と「地域と農業」という刊行物発行の二つです。これらについて、現場の第一線で農業に取り組んでおられる皆さん方から率直なご意見をいただくということと、今現地で何が起こっているのかということをぜひ伝えていただきたいと思います。

最初にまず自己紹介やパートナーの紹介、この一年を振り返って、わが農場、わが仕事のできごと、また地域のできごとなどをお話し願います。

この一年を振り返って

真　嶋　私は、一〇年ほど前に合併して和寒・剣淵・士別で一つの農協になっております道北の士別市のＪＡ北ひびきからまいりました。営農部の農業振興課で、主に補助事業や転作関係の交付金などの事務や、役所の下請けみたいな仕事をしております。夏には婚活の仕事もいたしました。以前の部署では法人の設立支援などにも関わらせてもらいました。うちの農協のエリア内には農家が一、三〇〇戸以上あり、面積が二万三千haくらいありまして、全国一の作付けを誇るかぼちゃや、特徴ある貯蔵・出荷で知られている越冬キャベツなどの作付があり、主に米、大豆、麦を作っています。畜産は、酪農経営と肉牛経営が中心となっております。地元には日甜（日本甜菜製糖株式会社）のビート工場などもあります。

中　野　私は今四四歳です。平成十一年二六歳の時に、神奈川県の茅ヶ崎から北海道名寄市の夏井さんのところで四年間修行をして、平成一五年に新規就農として名寄市の中名寄という場所に入植させていただきました。今は、米を一〇haと、ミニトマトでトマトジュースを作りまして全国へ売りに回っています。先月も二週間、

中野康則さん

九州の宮崎の山形屋という百貨店の北海道物産展へトマトジュースを売りに行ってまいりました。来月も有楽町のどさんこプラザで一週間トマトジュースを売らせていただきます。僕はこのように対面販売をしてお客様のお話を聞く中で、農産物を加工して売るということが重要で、非常に大事なことだと考えています。新規就農者が農産物を加工して売っているということに対して、六次産業化という言葉では語られますが、農協や大きい団体の方は支援してくれません。ところが、小売の現場ではそういうものを求めているのです。求めているのですが、求めている人たちが「じゃあ、お金を出して支援しようか」というと、支援体制は整っていません。いま僕は、市の加工施設を使ってトマトジュースを加工しています。あまりマスコミには載せないようにして徐々に段階を踏んでやっているのですが、だいぶ支援している人たちも増えて、支援してくれる方から別の場所に加工施設を用意するという話もあります。僕は名寄市で農業をやっていますが、名寄という場所に固執してしまうとどうしても加工施設ができないので、道外でトマトジュースを販売していますので、「オール北海道」という形で北海道の中で支援してくれるのであれば、加工の拠点を移してもいいと考えています。作るのは名寄、加工拠点はどこというように。いろいろなところに販売に行っていても「北海道の名寄です」というのをアピールするよりも「北海道の農産物」というアピールの仕方を考えています。今は海外のお客さんも来ていますから、そういうアピールもあるのではないか模索中です。

黒　澤　補足しますと中野農場のトマトジュースは、「トペンペ」というブランド名で首都圏を中心に大変な高価格での販売をしております。

津　島　我が家は畑作専業で、小麦、ビート、大豆、小豆、金時、ばれいしょ、スイートコーン、にんじんの八品目で輪作しています。

津島　朗さん

家族労働は私と妻と娘とほとんど三人が主力になって作物を全て機械で収穫しています。春の蒔き付け等忙しいときには、パートさんを三人から六人、足りなければ派遣の人を雇用しています。

近くに十勝川温泉がありまして、修学旅行生の農業体験の受け入れの協力をしております。本州の高校ですと、学年八クラスや九クラスで三二〇人が一度に来るという体験を二年ほどやりました。多いときには二回来て六百名ほど受け入れました。学校としては北海道ばかりで続けられない、次の年は沖縄へ行くという説明を受けていましたので、そういった大人数の受入れは終わったのですが、今

は、春先に三〇人ずつ二日間ということで、温泉に泊まって、農業体験だけうちにくるというのを受けています。農家に民泊というのもやっていまして、だいたい年間二〇人ほど大阪の高校生を主体として泊めて農業体験や農業生活をしてもらって、農業の理解者を拡げているところです。

もう一つは、「メロディライン」というバイパスが十勝川温泉まで伸びまして、その沿線上にうちがあるのですが、他の三軒ほどと協力農家として頼まれまして、いろいろな作物の畑の縁でカフェやイベントをする「畑カフェ」という催しをやりました。例えば、秋にいもの畑の近くでやったらいもの収穫をしたり、一豆畑だったら豆を穫ったり、小麦畑だったらロールを置いておいて麦殻と戯れてといったことや、地元の食材を使った店が一日限りで出展して、三〇〇～五〇〇人くらい集まりました。

今年うちで秋口にやったのはスイートコーンの収穫体験と焼いたスイートコーンの試食です。スイートコーンを焼く機械は、商工会の方が近くの町のイベントで使ったもの見つけてきました。一本ずつ皮を付けたまま並べて、それがぐるぐる回って焼いていくのですが、二〇分くらいかかります。見ているだけで結構おもしろいのです。実は皮付きで焼くと蒸し焼きになるので、僕の持っていたイメージと焼いたトウキビの味が違って美味しくてすごく成功でした。

本業の仕事になりますと六月、七月に長雨で防除ができませんでした。無理しながらやった人もいますが、やれなかった人も多く、今年は小麦にすごく病気が出ました。いもの防除ではラジヘリが投入され夏に希望者の農場でやりました。秋も一旦は収穫が順調だったのですが雪が早くてかなりの人のビートが雪に埋まってしまいました。うちは予報を見ながら逆算して二日間ほど夜中じゅう掘って終わらせました。ただ小麦の防除が残りました。過去にやらないで終わった年もあったので、やれたらやるし、やらなくても多分大丈夫かなという腹づもりでいたのですが、雪が溶けまして、音更では麦が約六千haちょっとあるのですが、ラジヘリで千haほど急遽頼みました。旭川で雪が早くて防除ができなかったので十勝に来てやれたという話です。ラジヘリで約千haやって残りの約五千haは、それぞれ自分で雪が溶けて地面が凍っている朝だけ防除して、溶けてきたら昼間はやめてというのを繰り返して、三日間ほどで終わらせたという状況でした。

黒　澤　皆さんご存知かもしれませんが津島さんは指導農業士で、指導農業士界の若き牽引車として注目されている方で、およそ一〇〇haの大型畑作の営農を展開しています。

高　木　京極町から来ました高木です。実家が隣で、隣の家に嫁いだというかた

高木智美さん

ちです。羊蹄山麓はいもがメインで、にんじん・大豆・小麦・小豆を三〇ha作付けしています。

個人的にこの作物体系を変えずに何か地域に合っている作物をと思って、去年から白小豆を作り始めました。今年は、七aの面積で、畑起こしから蒔き付けの機械作業も自分だけでやって、防除は旦那さんですけれども薬のチョイスは自分でやっています。今年の十一月から白小豆のみの「どら焼き」を倶知安町のお菓子屋さんで作っていただいて、今一ヵ月経ちまして五〇〇個ほど売れています。お菓子屋さんの方で五個入りの通信販売もやっています。いろいろなお話をいただいたのですが、まずは地元で知ってもらいたいということと、白小豆自体作っている方がいないので、白小豆ってどんなものだろうということで、町のイベントに出したりしています。「地恵地楽（ちけいちらく）」という造語なのですが、地元の恵みを地元で楽しむというのがすごく好きで、まずは「どら焼き」が愛されるようにいろいろやっています。

話が前後しますが、旦那さんは七歳年上でお兄ちゃんと言っていた人が旦那さんになって、おじさん・おばさんと言っていた人がおとうさん・おかあさんになりまして、同居して子ども二人でやっています。機械が好きなのでGPSの自動操舵を自分で取り付けたりして今年一年間やってみてすごく勉強になりました。いいところも悪いところも、羊蹄山麓に合っているのか合っていないのかというのを試したり、役場に基地局建てていただいたらいいのかと思いアクションを起こしたりしたのですが、やっぱり難しいなというのはありました。でも、GPSやスマート農業、ICT技術を取り入れたいというのは、羊蹄山麓の方では経営移譲したばかり若手の人たちでは多いです。

京極町に今年からにんじんの共選施設が建ちまして、羊蹄のにんじんはすべてそちらで集荷しています。真空予冷も入れまして、関東までしか出荷できなかったのですが、関西まで出荷が広がりました。今年に関しては十勝や富良野よりも羊蹄山麓の方がまだ気候がよかったかなと思います。

黒　澤　高木さんは、お話しからも判るように、非常にパワフルな女性で、機械にも強く、スキーや山登りにも堪能です。農業生産の部分でも、生活の部分でも積極的・前向きにエンジョイしながら取り組んでいる女性農業者の一人です。

貞　広　美唄で米を中心に麦・大豆・そば・野菜などを作っていまして、借りている部分も多いですけれど全部の面積は六〇haで生産しています。米に関して

貞広樹良さん

はここ数年豊作といいますか収量が多かったのですが、今年は、そこまではいかないですけれども、平年作ぐらいの収量だったかなと思っています。味はいいと思いますが、品質的には品種によってゆめぴりかは腹白といいますかちょっと白い部分が増えた年かなと思います。

労働力としては妻と両親、夏だけきてもらっている人の五人でやっていまして、両親も七〇歳で年齢的に高齢になってきているので、労働力を考えなければならない、若い力を入れたいと考えています。

生産の他にも「体験工房よーいDON」というのをやっていまして、冬が中心ですけれども味噌の加工体験や、昔からやっているドンというポン菓子を作っています。ドンでおこしを作るのが冬の今の仕事です。味噌は例年二トンくらい造るのですが、ほぼすべてを仕込み体験で、うちで仕込んでもらって一年間保管して一年後に取りに来てもらっています。二ヵ月で一〇〇人くらい作っています。例年と違う部分ですが、米粉を使ったうどんづくり体験をずっとやっていたのですが、今年は、美唄市もタイや台湾から観光客を呼び込もうということで、米粉を使ったうどんづくり体験や餅つき体験で、海外の人が来るようになっています。

他には、今年新たに美唄に通称ホワイトラボという、雪を使って冷気で乾燥させる実験工場施設ができ、そこで干し芋を作る計画です。サツマイモは以前から自家用として少ない面積で作っていたのですが、それに合わせて美唄で大量にさつまいもが生産できるかどうかということで、今年は、一〇aの面積で「紅はるか」を作ってみました。できそうだなという結果で収量的にも悪くないという感じがしています。実際に工場が増えてきたら、それに合わせて地域で作っていけばいいのかなと思っています。

黒　澤　貞広さんは美唄の商工会との付き合いが深くて、他産業領域の方々ともいろいろコラボしていらっしゃいます。工房の「よーいDON」はスタートして何年くらいになりますか。

貞　広　始めてから一五年くらいになります。

黒　澤　就農してすぐ始められたのですね。チャレンジしてきた米粉の利活用に関して、「家の光協会」から出版されている本には米粉うどんのパートを執筆しておられます。

大　塚　新篠津からまいりました大塚早苗と申します。私は、中学三年、小学校六年、四年の三人の息子を育てながら、大塚ファームの副社長をしております。

大塚早苗さん

有機で二二品目の野菜を作っていて、約半分はミニトマトです。その他に、大根、にんじん、じゃがいも、葉物野菜もいろいろやっていますが、その中で加工品も作っています。農場は一八haと、北海道内でも小規模な農家ではあるのですが、作っているものが手でしか獲れないミニトマトということで、圧倒的に人手が必要なものですから、社員が七人の他に中国人実習生が二人、常勤のパートが三人、季節のパートを合わせると夏の忙しい期間は二〇人ぐらいのスタッフでやっています。

新篠津村は、札幌からでも北区や東区であれば二〇～三〇分で来られる札幌圏でもありますので、幸い社員やパートさんは札幌から来てくださっている人も多くて、人の確保には意外に困っていない状況です。社員は、以前は季節で雇用していたのですが、それではフリーター的な感じになってしまってなかなかいい方に長期間働いていただくことができませんでした。そこで、農商工連携や六次産業化というのが近年ありますけれど農商工連携からはじまって、今は六次産業化で干し芋を冬期間作っています。サツマイモを二・四ha作付けしていまして、だいたい五万パックくらいの干し芋を社員が作っていますが、四ヵ月くらいで完売するくらい人気があります。もっとたくさん作りたいのですがなかなか思ったほど収量が伸びていないです。七〇トンくらい入れてもいいくらいの貯蔵庫がありますが、現状三五トンくらいしか穫れていない状況です。

夫は高校を卒業してから農業試験場に就職しました。その後就農して、自分自身が農薬アレルギーだったということが分かって、農薬を使わない農業をめざしていき、まだ有機ＪＡＳ認証が始まる前から有機で野菜を作っていました。結婚した時はまだ家族だけでやっているような農家でしたが、それからどんどん社員も増えまして今のような状況になっています。

地域については、新篠津村は札幌圏であるということで結構後継者も沢山おりまして、離農者が少なくて土地が出ないです。土地が出ても隣近所の農家が優先的に買いますので、うちが買えるような場面にいまだ遭遇していません。いま無理をして土地を買わなくても、あと一〇年もすればどんどん出てくるのではないかという感じもあって、狭い土地で反収を上げるようにしています。今年は三三棟七五メートルのハウスでミニトマトを作っていますが、来年は五棟増やして三八棟にして、有機の圃場を少しずつ増やしています。

黒　澤　大塚夫妻は、ご夫婦で八面六臂の活躍ですね。このモニター会議には、

はじめは御主人に出ていただいていましたが、全国を飛び回るということもあって副代表の早苗さんにスイッチしてもらったという経過があります。早苗さんもたいへん忙しそうですが、今お話を聞いたように、経営内容の的確な掌握やユニークな農場戦略を持っておられ、パートナーシップ経営のあり方を示されています。

今、自己紹介の中でいろいろな農場の戦略に関わる部分も紹介していただきましたが、第二ラウンドはもう少し踏み込んだお話をしていただきたいと思います。二番目のテーマは今後我が農場、我が地域でこういうことが必要だ、あるいはこういうことに取り組みたいということを、先ほどと同じようにお話してください。

我が家の経営や地域の課題と展望

真嶋憲一さん

真嶋　人材の面で、雇用の確保が課題です。昨年から、行政と組んで「農作業の人材募集」のパンフレットを作って、ハローワークを通さずに農家と希望者互いのマッチングということで、取り組んでいるのですが、説明不足もあって人を集めるのは本当に難しいです。農家の方のアンケートでは、人が足りないという話と農作業についても受託してやってもらえないかという話があるのですが、その要望に応えられていないというのが現状で、そこをどうにかしたいと思っております。いろいろやってはいるのですが、使う側（農家）とサポートする我々との隔たりも大きいのかなということで上手くいっていない。ある地域では高齢となり農家をリタイアした人達を活用し活動している地域もあるのですが、まだまだ事例としては全体には広がっていないという状況です。

私は営農部に所属して地元の独身農家の婚活も行政と一緒にやっています。我々の地域は、農協は和寒、剣淵、士別で一つですが、行政が一市二町です。農政部局の行政の課長と我々の常勤常務との打ち合わせの中では、お金も出すので、婚活も農協でやって欲しいという話もあります。いろいろな事情から、結構年齢が高くても独身の方がいるのですが、婚活が上手くいっていないのです。業者にお願いしたり、SNSを使って人集めをしたりしていますが、皆さんの地域でいいアイデアやいい事例があれば教えて頂きたい。

もう一点、我々の農協は地元の普及セ

ンターと組んで、就農後三年程度の若い人たちを集めた農業ゼミナールを行っています。四二名の若い農家の方、女性も参加していますが、水稲・畑作・園芸の技術的なことを、作物の生育ステージの適切なタイミングで皆さんに集まってもらって勉強しています。冬場の研修は、経営ということで、我々農協が中心となり、中央農試の経営担当者に来ていただいて「クミカンの見える化」について研修したり、湧別の元農協職員の方で中小企業診断士の資格を持っている辻さんを講師にお呼びして、簿記と経営のお話をしてもらったりしています。

よその地域にもあると思いますが、農家の娘さんが旦那さんを連れて、実家で農業をと考え戻ってきている事例があります。見ていると、よその地区で別な仕事をして帰ってきた旦那さんが、義理のお父さんといい関係で一緒に農業をやっているという印象を受けており、この先こういう形もいいのかなと考えております。しかし一方では、離農していく方以上に新しく就農される方が少ないというのが現状です。そういった意味では地域に元気がないという部分もあります。今日の中野さんの話もそうですけれど、これからはいろいろな意味で農協という組織の意義も問われるのだと思います。ある意味僕も農協の職員の中では変わっているのかもしれないですけれど、農協職員も農家の方と普段接していろいろな話を聞いて、自分なりに情報を持っていかないと、もうちょっと外に出ていろいろな話を聞いて情報を集めて、課題を整理して、やれることからやらないと駄目なのかなと常日ごろ思っています。

黒　澤　先ほどご自分でもおっしゃっていましたけれど「農協職員としては変わり種だ」と。私が見ても個性的だと感ずるのは、農企業レベルの簿記や経営管理に興味関心を持っておられて、自分でも農業簿記や経営診断に習熟しています し、大学等の特別研修講座に自主的に参加されています。また経営管理のみならず、北海道農業普及学会や道北作物学会など技術等の学会等にも加入して活躍されています。農協職員のあるべき姿について強い問題意識・危機意識を持っているからだということが、今のお話でご理解いただけたかなと思います。

中　野　いま名寄市では、二年間名寄で農村生活をしていただいてそののちは農業をしていただくということを、地域おこし協力隊という事業でしています。それでもまだ地域おこし協力隊は三人か四人くらいしかいないので、もう少しこれを活用していく必要があります。

僕が新規就農という立場で十何年やって思うのは、例えば都会の人が農業をやりたいと言って東京ビッグサイトなどの地域おこし協力隊のイベントへ相談に行くと、他の地域の方も言うのですが、農業は大変なのだと、あまりにもそれを強

く言いすぎて希望者が萎縮してしまうということです。農業も多様性に富んでいるということをもう少し言って欲しいと思います。例えば大塚さんやここにいる皆さんが農業の加工をやるというような、農業には多様なやり方があっていろいろなことができるということを、行政の方も道の人も取り入れて言って欲しい。あまりにも「農業というのは大変なんだ」、「この関門をクリアしないとこういうことはできない」と、それは当然のことなんですけれど、あまりにもそれが強く出てしまって農業をやってみようという人の障壁になっているのではないかという気がします。

黒　澤　ご自身も新規就農されました。その新規就農した中で、現在では地域の中核農業者として既存農業者の方に頼られる存在になっています。一緒に新規就農者として入った福島さんともタッグを組んで、いろいろチャレンジしている。そんな経験から今おっしゃったようなことを強く感じているということで提起してくれました。

黒澤不二男さん

津　島　まず、音更町にGPS基地局を建てましてスマート農業を推進していくということで、興味のある人はどんどんやっています。事業もどんどん進んでいくので、今は慌てなくてもいいのかなという気がしています。

まわりの動きでは、古い話ですが温泉熱を利用してマンゴーが順調に実っています。やっている人の話を聞くと、できればまわりの人にもいっぱいマンゴーを作ってもらいたいとのことですが、どうやら、ロットを確保して安定供給しないとなかなか売りづらいということのようです。

畜産関係では新規で入った人は放牧中心に酪農をやっています。既存の人はおおむね労働力軽減のためロボットを入れて搾乳をして拡大をしていくという流れになっています。そこには糞尿処理の問題がありますが、音更では、野菜の残渣も一緒に処理してバイオガスプラントで発電して、電気を売ってバイオガスプラントを維持していくという計算でやっています。隣の士幌町では、そのバイオガスでフグの養殖をしています。鹿追に行けばチョウザメを育てています。

あとは温暖化の影響でいろいろなものが獲れるということで、ハウスでゴーヤを作ってみたり、ジャガイモだなと思ってよくみたところ変だなと思ったら、一列百軒も全部サツマイモを蒔いている人がいたりします。とりあえず生産ができるのだと分かると、そこに六次化の話が入ってくる。芋焼酎を造ったらいいんじゃないかという話も飛び込んできてなんだか分からない。ジャガイモの産地で

サツマイモの芋焼酎を造ってどうなんだろうと。なんでもできちゃうというような話が飛び交っています。また、イナキビやリーキを栽培している人がいたり、ナタネ栽培をして油を搾るという人たちもいます。

黒　澤　ちなみに、津島農場の隣はGPS活用・自動操舵分野で先駆的な方で、同じく一〇〇haくらいの土地でトラクターを自動で走らせています。そのあたりのこともありますし、音更の高付加価値農業の取り組みはかなりいろいろやっている。そのあたり、津島さんはじっくりと見定めながら、これからの農場展開を図ろうとしているということですね。

高　木　ようてい農協ですけれども、人材確保という点では、後志総合振興局と農協が今年のはじめに「まち・ひと・しごと」マッチングプランといって、ニセコ・倶知安・留寿都のスキー場等の観光施設で冬のシーズンに働くために本州から来ていて、夏の間は職探しで転々としている人が多かったので、そこを農業分野の人材確保に結び付けようと取り組んでいます。まだスタートしたばかりということもありまして聞いてみると海外の人もいるのですが、かなり遅れてくるなど時間に相当アバウトな方がいたとか、日本人は働くのですが農作業がきついと感じている方が多かったという話を聞きました。

また、新規就農ですが、すごくウェルカムな町も近隣にありますが、そこから認定農業者へのステップアップがなかなかできないという方もすごく多いですね。

黒　澤　実際に認定農業者になるためには、農地の取得やそういう部分も含めて就農後でもしっかりサポートすることが必要なのですね。

高　木　長期スパンのサポートは、まだまだだなと思います。

黒　澤　そういう意味では、美幌町の事例では、新規就農された単身女性農業者に対しても、地域から農地の斡旋を受けて地域に定着しているというケースもあります。地域の取り組み、農協・農業委員会・市町村含めて長期の支援体制をとらないと、看板として新規就農・担い手育成推進、定住化人口の増加などと言っても、後が続かないのかなという感じがしますね。

貞　広　僕からも新規就農の話ですけれども、Uターンで親元に帰ってくる人は年に何人かはいるのですが、Iターンで全く経験のない人の就農については、美唄の農協も市役所もいままでは消極的というか全く力を入れてこなかったように感じます。去年くらいから指導農業士・農業士が研修をする体制を作ろうと動き始めたところです。先日札幌であっ

た「新・農業人フェア」に市役所の農政課の人と一緒に行ってみました。僕は初めてだったので他の市町村のブースをいろいろ回ってみたのですが、住宅のことなどかなり支援体制が厚く、それに比べると、美唄は強く訴えられる部分がなくて、それもあってかなかなか人が寄ってくれなかったという状況でした。きちんと支援体制を整えていけば少しは希望もありますが、現状ではまだ動き出したばかりというところです。

黒　澤　「新・農業人フェア」は、行政や関係機関、担い手育成センターがかなり力を入れてやっています。そこに既存で就農した人たちのノウハウ・体験を活かすために、そういう人にその地域のブースに出てもらって、就農希望者に実践的なカウンセリングやコンサルティングをしてもらうというように上手く活用しているところがあるようです。そういう意味では、美唄市でも貞広さんや内山農園さんなど多彩な人材がいますので、そういう方々の知見・能力を上手く活用することも考えたらいいのではないかと思いますね。

大　塚　村の問題を集約すれば人材不足と嫁不足、雇用の不足、この三点に集約されるのかなと思っています。まず嫁不足ですが、さきほど出会いツアーの話しが出ていましたけれど、実は私、その出会いツアーで新篠津にお嫁に行ったのです。参加していろいろな方とのマッチングもあったのですが、そこにたまたまそれに参加していなくて体験の受け入れだけをしていた夫がおりまして、「参加者でないけれど大塚さんが一番いいと思った」と私が言って、それが出会いだったのです。じゃあ、

なぜ参加者の誰もいいと思わなかったのかというと、参加者の方で「自分は農家の長男に生まれたから仕方なく農業をやっている」であったり、「新篠津は田舎で自分も田舎もんだ」のような自分を卑下した雰囲気があったのです。私は明るく笑顔で自分の仕事や地域に自信やプライドを持っている人がいいと思ったのです。農家だから結婚できないわけじゃなくて、農家でもいいなと思う人はみんな結婚している。申し訳ないですけれど四〇歳、四五歳を過ぎて結婚をしていない人はもう結婚しないと思うので、結婚できる息子を育てた方がいいと思うんです。中高生や小学生ぐらいから、将来結婚できるように社交性を育てた方がいいと思います。そう思って、息子は結婚できるように育てています。

人材不足ですけれど、新篠津村は人間が少ないにもかかわらずコミュニティが多くて、第一から第五それから中央と六つの区があって、さらにその中に三つぐらいずつ自治会がある。それぞれに自治会長、副自治会長、会計という役員がいます。だから、どこの家族も一人いくつも役員をやっているという現状なんです。これを直していかないと、人は減っていく一方なのに負担が凄いです。実際にうちの夫もすごくやっていまして、いよいよ人がいなくなって議員にならなければいけないと、昨年から村議会議員になっています。夫が村議会議員になったせいで、夫が既にやっていた役員がだいぶ私のところに回ってきて、農業法人協会の役員などをやっています。それも、夫ができなくなったから私がやっているみたいな感じです。なぜそうなるかというと、「あの人どうだ」となると「あの人は結婚していないから駄目だ」とか「あの人のところは経営が悪いからだめだ」とか「あの人のところは子どもがいないから駄目だ」となる。そうしたら、結婚していて子どもがいて、経営が良くて人望の厚い人しか役員ができない。そんな人、人口三、三〇〇人の中で何人もいないでしょうとなって、同じ人ばかり。会が変わってもメンバーが同じという現象が起きています。そこをなんとかしていかないと、これから農村は難しいと思います。

最後に雇用のことですけれど、うちは意外に人材の確保に困っていないというのには理由があって、通年で雇用しています。期間の短いパートさんにも、それなりの待遇で雇用しています。農家の人が田植えと稲刈りの時だけ来て欲しいと言っても、その時に農作業ができるような元気な人が、それ以外の期間ずっと家にいるわけではないので、みんな通年で仕事が欲しいわけです。うちは皆さんを通年で雇用するために、二二品目で暇な期間がないように作物を作ったりしています。生意気な言い方ですけれど、人を雇用するということは、その人の人生の一部にお金を払って買っているわけなので、その人の生活にある程度責任を持って雇用するものだと思っています。

黒　澤　農村の配偶者問題や地域コミュニティのあり方という問題ですけれど、いま新篠津の事例としてお話がありましたが、多分北海道全体の縮図だと思います。

私は長沼町に住んでいますが、長沼町も同じ。何処へ行っても、これはと思う人はいくつもの公職等についているというケースが多いようです。ただ、能力がある人がいろいろやらざるを得ないのはやむを得ないという側面もあるのではないでしょうか。

配偶者問題ですが、私も全道結婚相談員の研修会・研究会に関わっているのですが、大塚さんが言ったように結婚の機を逃した人はそのままになってしまう。必ずしも地域で一生懸命お膳立てしているから、成婚率が高くなるというものでもない。このあたりは非常に難しい問題で、研究会の中の議論でも、「婚活パーティをやれば人が集まってきてパっとまとまる」というほど単純ではなくて、婚活パーティをやるのにも相当上手く考えて仕掛けなければならない。そのための事前研修会をやるといった議論もありました。当事者に関して、地域での農協や市町村などの取り組みの是非ではなくて、家庭でどういうふうに子供を育てるかに帰属する部分もかなりあるのかなと思います。その意味で、結婚したいという青年を集めて研修をするよりも、親を集めて研修をして親の認識をしっかりと変えることも有効かなと思います。

皆さま方から、特に地域での農協なり市町村なり行政での取り組みで、もう少し改革・改善した方がいいという趣旨のご提言をいただきました。地域農業研究所の研究課題として重要な提起をいただいたと思っておりますので、飯澤所長はじめ研究所の皆さんが研究課題として取り組んで関係機関にアピールするような仕事を継続していくのではないかと思います。これで意見交換を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

伊　藤　大変ご苦労様でした。改めて皆さまのお話を活かしていかなければならないと思っています。

農業をとりまく情勢はいろいろございますけれども、北海道の農業の実態に触れ、「足腰強く将来に向けて進んで行けるのだ」と、改めて、思いを強くしたところですが、私ども地域農業研究所としてもなんとかお力になれるように努めてまいりますので引き続きよろしくお願いします。本日はありがとうございました。